氏　　　名　西　村　大　志（にし　むら　ひろ　し）

学位(専攻分野)　博　士（文　学）

学位記番号　論文博第 516 号

学位授与の日付　平成 18 年 7 月 24 日

学位授与の要件　学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目　子どもの身体技法の構築
　　――「もの」と「身体」からみる日本の近代化―

論文調査委員　（主　査）教 授 松 田 素 二　教 授 伊 藤 公 雄　教 授 落合恵美子

論　文　内　容　の　要　旨

日本の近代化にともない，児童の身体技法が構築されていくなかで，「もの」「身体」「言説」は，いかなる網の目として張り巡らされていくのか。そして，それは，児童の主体化をうながす「装置」としていかに構築されていくのか。これを歴史社会学的に探求することが本稿の問いであり，また「身体の社会学」の新たな可能性を探るものでもある。歴史社会学的ということは，これまでの「身体の社会学」が哲学的・思弁的なものに偏重してきたことへの違和感から発している。また，「言説」のみならず，「もの」に関する図や写真も取り込み分析する手法は，歴史社会学が，あまりにもフーコー流言説分析に傾斜している社会学の現状への批判でもあり，また一方で構築主義的分析を独自に組み替えて用いる試みでもある。

本稿では，研究対象を「日本の近代化のなかで，児童が学校で椅子に座るという身体技法を身につけていく」という非常に狭い範囲に限定し，明治初年から大正末までの史資料を中心に収集し分析していく。

第１章では，明治初年，西洋近代的身体観や「もの」が，なかば強引に移入された様子がえがかれる。小学校には机や椅子という「もの」が導入され，児童は椅子に長時間座るというあらたな「身体技法」を，身につけねばならなくなる。「養生訓パラダイム」が，西洋近代的身体観に切り替えられ，天神机という近世の「もの」が，西洋風の机や椅子にとって変わられていく。寺子屋式の運営が，学校式に切り替わる時に，「もの」や「身体技法」が変化していく様子と，それへの反動が記述される。本稿に通底する近代化の見方は，明快に近代が来たというシンプルな「西欧化」モデルでもなければ，近代化によりさまざまな「日本」の伝統なるものが，過去にさかのぼりつつ創造されてしまうという「伝統の発明」モデルでもない。「受容・加工・再構築と齟齬のせめぎ合い」を精査する立場である。知識人と民衆，言説的な世界と非言説的な世界，都会と田舎の断絶と混淆は，シンプルな腑分けを許さない。

第２章では，公衆衛生言説の移入や「身体」と「もの」の欧化思想が，「言説」レベルを中心に描かれる。しかし，『大日本私立衛生会雑誌』にみられる衛生啓蒙「言説」の上で，いかに近世的身体の有り様が批判されようとも，また「日本人種改良論」のような過激な欧化思想が流布しようとも，それは知識人界にとどまることが多い。

このような欧化一辺倒の知識人たちの言説は，近代化の対象としての具体的かつ個別的「身体」を十分に獲得できず，浮遊する。その一方で，机や椅子といった西洋的「もの」を導入すればそれでいいというような，「もの」中心の近代化論も批判を浴びる。そして，衛生学や医学などの学問的議論が，当時明瞭に把握されていなかった〈児童の身体〉や〈日本人の身体〉といったものを，安易に前提にしていることが明るみに出る。

第３章，第４章では，学校衛生における言説・もの・身体の連関の構築が，実践的にかつ現場調査にもとづいてなされていく様子が，具体的に精査される。前述のように衛生啓蒙言説が盛んだったころは，身体計測の技術も明瞭ではなく，そのため議論の前提となる〈児童の身体〉そのものが，単なる印象論で語られがちだった。そこで，身体を実践的に把握する手法が盛んに導入され，身体検査実践も盛んになる。そして，それをもとに〈日本〉の実態に即した学校衛生学などといった「知」や，机・椅子などの学校設備という「もの」を組み立てていこうということになっていく。そこで重要な役割を担ったのは，学校衛生学者三島通良である。彼は，〈日本の子どもの身体〉を具体的に同定するために，日本全国を巡回し，膨

大な調査を行っていった。三島は，「身体」の具体的把握だけでなく，学校における近代的な言説・もの・身体の連関を構築した中心人物であり，把握した身体にもとづく「もの」（机・腰掛けなど）の設計に腐心した。

しかし，三島の思惑どおりの近代化がなされたわけではない。教育雑誌や医学雑誌を細かく分析していけば，医学界と教育界はしばしば対立している。医学界内部でも，小児科と眼科といったような，より小さな分野が抗争を繰り広げる。近代化と医療化は，わかりやすい形で同時進行しない。医学界と教育界が「児童の身体」という新たな領土をめぐって，利権争いを繰り広げるのと同様に，医学内部の個別分野もまたさまざまな抗争の舞台となった。

一方，民衆は「身体計測」そのものに疑いを向け，生理的に忌避する。そのような中で，児童の姿勢の悪化が「脊柱彎曲症」，「近視」などの病の誘因となることが学術とくに衛生学の側から問題とされ，その「病」の定義や治療法をめぐっても議論は紛糾した。さらなる問題は，医学が，身体そのものを把握しても，それは裸体を前提とした解剖学的身体であって，ものと身体の間には，衣服や身体技法などの民俗的慣習が巻きついているということ，そして，流行・風俗・民俗といった次元への無理解であった。

しかしながら，児童の身体を客観的に捉える身体測定や健康診断については探究が行われていく。そして，身体測定や健康診断の結果を児童にいかに内面化させるのか，という課題が浮上する。ここで重要なのは明治中期にかけては病の原因は「もの」にあり，「身体」の把握にもとづいて「もの」を設計することで，児童の健康を周りから確保してやることが重要であるという価値観が，教育界や医学界という立場を越えて共有されていることだ。三島通良時代は，身体と環境のよい関係を構築することが，学校衛生学の第一の課題であったことが見いだされる。

第５章では，本稿が重視する言説分析に収まりきらない手法が試みられている。当時の机・椅子の写真や設計図，特許資料などから，いかなる工夫が展開されていたかを「もの」のレベルで分析している。図や写真は，思想と実際の現場のズレ，そして，中央と地方，そして，上流階層と下流階層の学校の違いなど，言説至上主義的分析からは見えてきにくいものを，明るみに出してくれる。中央から通達したものは，地方の実状にそぐわず，現場では，さまざまな工夫が加えられている。たとえば，子守学校の机の図や，外国人のみた日本における貧しい学校，豊かな学校の図の対比は，言説から見える整序された近代化イメージをゆるがせるものである。

第６章では，「身体」をめぐる知が大きく転換していく様子が描かれる。明治末から大正初頭にかけての時期には，学校衛生実践は下火になってくる。しかし，一方でおおきな「知」の地殻変動とでもいうべきものがこの時期に起きている。児童の身体をめぐる「知」は大きく転換した。教育学と医学の連携は，児童学を介して推進され，身体は，精神と連関させて問うことが盛んになる。遺伝学や，優生学の台頭もおおきい。

遺伝学の影響もあり，児童の病の多くが本人の「体質」によるところが大きいということになった。病はまわりの「もの」のせいではなく，本人のせいであり，精神の有り様も身体に影響するとして問題視される。病の原因は，身体外部の「もの」から「身体」内部へ，もっというなら精神へと内部化される。身体検査の方式は，児童の身体を医師が一方的に見るものから，児童が自己の身体を知る自動装置へと，変化させられていく。また，この時期は身体を通しての児童の主体化の装置が構築される土台が，整っていく時期でもあった。明治初めの養生から公衆衛生への流れが，公衆衛生から個人衛生へと螺旋状に移動しはじめる。

第７章では，前章で論じられた思想レベルでの転換が，実際の，言説・もの・身体の連関にあたえていく影響そして，その近代的枠組みの構築のさまが描かれる。学校衛生実践がふたたび盛んになった大正年代からは，新たな枠組みのもとに児童の身体が扱われることとなる。言説・もの・身体の連関が，学問的言説空間にとどまらず，実践的に再構成されていく。

児童の身体のありようは児童の体質によるところが大きく，児童の身体を改善するためには，児童自らが「自由」に自発的に努力せねばならなくなった。そしてそこには身体を介しての主体化の仕組みが，巧妙に内包されていた。

第８章では，前章で描かれたような身体技法を通しての近代そして，そこに潜む主体化の装置の蔓延と拡散がさらに個別に追求される。また，そのような身体技法の教育を通じての主体化の装置からずれていく様子も描かれる。

学校での枠組みは家庭へも流入し，児童の身体はより広く医学，教育，衛生，児童学等の知の影響のもとに置かれることとなった。この衛生学の流れ込みは，学校から家庭へ直接的に流れ込むという単純なものばかりではなかった。大正期には，林間学校や，早起き会，衛生展覧会といった「学校的なるもの」が拡大されていった。子どもたちも，それに自発的に参加

できるシステムが作られる。それは，強制とは言い切れない，娯楽的要素を含むものだった。一方，メディアの普及は，新聞の相談欄における健康相談といった形での双方向的やりとり，および日々音声として流れ込むラジオといった形で，児童を，親を，そして家庭を衛生化していった。さらに，本稿の結末では，ある程度の揺れを伴いながらも，受容・加工・再構築を繰り返す近代化のイメージに，さらなるゆらぎを加える資料が提出される。それはたとえば，国木田独歩，三宅やす子，入沢達吉などによって書かれた作品であり，子どもの投稿した新聞記事であり，今和次郎の研究などである。「もの」は制作者の意図とは違うように流通するし，「言説」も一般の人々の生活をそう簡単にはかえない。入沢達吉も人民の風俗は法律などでは変化しないと明言し，自らも和式の生活を前提に坐り方を研究している。また，今和次郎の研究も男女における身体をめぐる風俗の違いを，如実にしめしている。これは「もの」や「身体」から考え，図や写真などから，学問に近い「言説」群と違った位相をみることで把握できることだ。

ここでは，「言説」至上主義的研究の限界がより詳しく探求される。さらに身体の社会学が，哲学的・思弁的に踏みとどまらず，また一方で言説至上主義に陥らない方法が考察されている。具体的には，歴史社会学に，歴史人類学や技術史的視点を融合し，図や写真そして小説や日記資料もとり込みつつ，研究を展開できるのかを検討し，身体の社会学を歴史に開くことの可能性が述べられる。そして，このような手法が，日本の近代化を問い直すうえでも有効であることが示唆されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，明治期の子どもの身体と身体技法の変容に焦点をあてて，日本社会の近代化経験に関して新たな視角から解明を試みた野心的な歴史社会学的研究である。

本論が主要な関心を寄せたのは，明治初期，近代学校制度の導入に伴って児童生徒が経験した上からの身体の変容過程である。近代的学校空間において，教室には児童生徒用の机と椅子が常備され，それらを使用することによって，教育課程を実践することが定められた。それは従来の寺子屋空間における，座して学ぶ方法とは大きく異なる，身体技法上の「革命」でもあった。新たにもたらされることになる椅子と机の大きさや形状は，明治期に誕生した医学者，とりわけ小児科医と眼科医が加わった国家主導の委員会によって議論され画一化されていく。こうした標準化にあわせる形で，子どもたちの身体は規制され構成されていくと同時に，彼らは新たな身体技法を身につけることになる。西村氏の研究は，この過程で生起する微細で錯綜した議論と交渉を，綿密かつ詳細に分析する。

本研究が「身体の歴史社会学」に与えた貢献は，以下の三点に要約できる。

第一の貢献は，理論枠組にかかわるものである。従来，近代化にともなう身体の変容に関しては，ミシェル・フーコーの理論枠組を援用して考察する研究が圧倒的に主流であった。身体に対する規律・訓練と，そこに発動する権力作用を批判的に読み解く研究群が，この分野では定着しているといってよい。本研究は，こうした理論枠組をフーコーモデルとして定式化し，それに基づく研究方法の不十分点を検討する。西村氏によると，フーコーモデルの最大の欠陥は，言説研究に特化することによって，身体と密接不可分の関係にあるモノを視野の外に追いやってしまう点にあった。言説，しかも近代マスメディアが採用した言説によって現実を分析すると，それらのメディアの存立条件を規定している近代国民国家の影響をそこに「再発見」し，その批判的解明に向かうという方向へと収斂してしまう。本研究は，こうしたあらかじめ定められた結論を生み出すモデルから離れて，モノそのものが発する問いとモノそのものの変化を創り出す過程へと視点をシフトすることを通して，モノ，言説，そして身体という三つの極を重層的に捉える枠組を提唱している。

本研究の第二の貢献は，明治期における子供の身体経験の現場に見られる諸力の交錯のメカニズムを実証的に解明した点にある。本研究のもつ特色をもっともよく表しているのは，第三章から第五章であり，そこにおいて西村氏は，フーコーモデルを乗り越える実験を試みる。西村氏が言説に代わって注目し活用したのは，図像や写真，設計図などの非言説資料である。

こうした非言説資料への関心は，西村氏の独創ではない。実はフーコー自身も，『監獄の誕生』において非言説資料への越境の可能性を指摘しているし，N・アリエスも『文明化の過程』において礼儀作法書の記述というミクロな資料から国家形成というマクロな現象までを見通す試みを実践している。西村氏もフーコーモデルを批判する一方で，フーコーのこうし

た研究らアリエス，川村邦光などの研究成果を丹念に検討し評価している。西村氏の研究が独創的なのは，児童の座る身体技法一点に注目し，それに関わる言説と非言説資料を包括的に収集考察して，身体，モノ（児童用の学校机と椅子），それに言説（知識）が相互に密接に絡み合いながら，身体技法を構築していく過程をクリアに描き出すことに成功している点である。

学校机と椅子の策定の中心人物であった，明治の学校衛生学者三島通良は，明治期日本の児童の身体を特徴づける「脊椎彎曲症」の是正を，児童の身体健全化の主要課題として，学校机と椅子の考案を国家プロジェクトとして開始する。西村氏は，当時の机・椅子の写真や設計図，特許資料などの非言説資料を駆使して，このプロジェクトが推進される過程を明らかにした。なかでも三島通良の意図に反して，各地の学校現場においては，さまざまな創意工夫と換骨奪胎が行われた結果，地方によって多様な受け入れ・修正の様式を示したことは説得的に分析されている。

本研究の第三の貢献は，近代化の一般モデルに対するものである。社会学における近代化の社会変化モデルは，20世紀後半において，前近代（伝統）社会との断絶が強調される単線的進化モデルが主流であった。しかしその後，前近代との切断ではなく連続性・継続性に力点を置く研究へとパラダイムシフトが起きるようになった。しかしこのモデルも1980年代になると，伝統を装った近代（伝統の発明モデル）という認識が強まり，ふたたび切断と断絶が強調されるようになった。これに対して本研究は，より複雑な諸力の交錯に注目することによって，「伝統の発明」モデルを乗り越えようと試みている。すなわち「伝統の発明」モデルに代わって，本研究は，「輸入，融合，拒絶，選択的受容」のモデルを提唱しそれに基づいて実証的考察をおこなった。

以上のように本論文は，明治期，子どもの学校における身体技法生成過程の解明を通して，近代社会における身体，モノ，言説という三極構造の深層に迫ろうと試みた意義深い研究である。しかしながらいくつかの点で不満ものこる。一つは，身体，モノ，言説の三極モデルの説明が論理的厳密性に欠ける点であり，もう一つは，膨大にとりあげた非言説資料の説明が十分ではなく，たんに挿絵程度の位置しか与えられていないものもあることだ。さらには，七章，八章が子供の身体経験から離れて，唐突にメディアの次元へと移行するなど，構成上の荒さが目に付くことも問題である。

しかしながら，これらの問題点を考慮しても，本論文の優れて独創的な価値が損なわれることはない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2006年２月14日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。